



Series

もうひとつの まち 都市の中へ 7

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より



## 日常に遍在する芸術性

写真における風景との出逢いの瞬間、それはその場所に対して何か特別な奇異感を抱いたときです。見慣れた小さな日常の中に在りながら、厳かに自らを主張する風景たち。しかし、こちら側がアンテナを立てていないかぎり、風景たちが発しているアウラ{Aura}は決して受信できないのです。カメラという記録装置が時間を切り取るタイムマシンまがいなことができるとしても、現実が進行形であるかぎり、容赦なく次の現実がやってくる。でも稀に時間の遠近感の狂った風景が目の前に唐突に現れ、フィルムにもうひとつの現実が定着されることもあるわけです。

今宵出逢った奇妙な風景は「柱」。

最初の写真は、とあるホテルのエントランスに建っているシンボリック存在の柱。もうひとつは神崎川に建設中の水門の一部分。両方とも非常にインパクトがあり芸術的でもあるのですが、二つの風景には決定的な違いがあります。それは前者の顔をモチーフにした柱が意図的な芸術性をもってつくられたのに対して、後者の水門の柱は意図的ではなく、工事途中において偶然生まれた芸術性だということです。今、まるで遺跡の様にも見える水門支柱の台座には、やがて水門の機能を果たすべく機械や金属部品などが取り付けられ、どこにでも在るような水門として周りの風景に違和感なく溶け込んでしまうでしょう。

それぞれの風景にはそれぞれの異なった未来がおとずれるわけですが、さらに時間を進めることで、平凡な水門もいつしか周りの景色との調和を崩し、芸術性をもって再びアウラを発することもあるかもしれません。

朽ち果てる美学、壊れていく切なさ…。

そのとき、僕のアンテナは再び強く反応し、そのなれの果てを受け入れるべく、フィルムに記すのです。



## Profile

松本 コウシ Koshi Matsumoto

1961年広島生まれ。  
大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。  
夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」  
「ウィークエンド」「記憶への旅」「肖像権」などの著作がある。  
日本写真家協会・日本写真協会会員。